

# シアトルの近代絵図資料と市街地の変容

杉 浦 直

## I. はじめに

## II. 絵図資料の所在と製作背景

## III. 絵図資料と市街地形態

- (1) 1855-56年手描き地図と最初期市街地
- (2) 1878年鳥瞰図と市街地形態
- (3) 1884年鳥瞰図と市街地形態
- (4) 1889年鳥瞰図と市街地形態
- (5) 1891年鳥瞰図と市街地形態

## IV. 結語

## I. はじめに

シアトルは、アメリカ西海岸の主要港湾都市のなかでも、19世紀半ば以降目覚ましく拡大成長した都市の一つであり、その発達過程には少なからぬ学術的関心が集まった。その多くは歴史学的視点からのもので、セールやウォレンなどによるシアトルの都市史を概括した著作が出版された<sup>1)</sup>が、これらに地図を用いた地理的視点は希薄である。一方やはり歴史学の分野内ではあるが、バンクーバー(カナダ)と比較しつつ初期シアトルの発達過程の特色を考察したマクドナルドの著作には、既存の地図資料の提示も含まれており、また写真を中心にしてビジュアルにシアトルの歴史を描くホームズの著作には、本稿でも使う鳥瞰図2葉が掲載されている<sup>2)</sup>。一方、シアトルを含むワシントン州の各都市の成長傾向を検討したシュミッドらの報告書では、異なる年次の都市内人口分布図を提示した地

理的な分析も見られる<sup>3)</sup>。

しかし、歴史地理学的視点から一次資料を使用して市街地の発達過程を実証的に捉えようとした本格的な論考は管見の限りあまり見られないと言ってよい。ちなみに、シアトルに拠点を置くワシントン大学地理学教室が総力を挙げて編纂した『シアトルの地理』には、シアトルの地理の多様な側面がほとんど網羅的に描かれるが、歴史地理学の立場からシアトルの発展・変容を追求する分野は欠落している<sup>4)</sup>。一方、日本においては、地理学者による同都市の発達過程についての論考も見られる。そのうち矢ヶ崎論文には、シアトルの生成と初期市街地の状況についての考察も含まれる<sup>5)</sup>。また永野は、19世紀におけるシアトルの都市計画の特色や都市化状況を検討している<sup>6)</sup>。しかし、同都市の初期市街地に関する地図的な資料の所在を確認し、それらを用いてシアトルの発達過程や初期市街地の特質をより詳しく考究する余地はなお大きいと思われる。

以上に鑑み、本研究ではシアトル初期市街地の状況を示す地図的資料、特に手描き地図や鳥瞰図など絵図資料に着目し、その特色、表現内容を検討するとともに、絵図資料から読み取れる市街地の生成・発達過程の一端を提示する。シアトルは、アメリカ太平洋岸北西部においてポートランドとともに、これら絵図資料を豊富に残す都市の一つであり、その活用を図ることが歴史地理学において求め

キーワード：絵図資料、鳥瞰図、市街地形態、シアトル

られよう。

## II. 絵図資料の所在とその製作背景

シアトルの古い地図資料を特に豊富に所蔵している機関としては、ワシントン大学図書館「北西部特別コレクションズ」(University of Washington Libraries, Northwest Special Collections) 及びシアトル公共図書館「シアトル室」(Seattle Public Library, Seattle Room) が挙げられる。筆者は、これら2つの文書館(アーカイブ)において、1900年以前の地図類29葉を検索し、その内容を吟味した。本論文では、そのうち特に手描き地図及び鳥瞰図の6葉に焦点を当てて検討する(表1)。

これら6葉の製作背景のうち、番号1は後述するように偶発的な経緯により作成されたものなので、ここでは残り5葉(2~6)の鳥

瞰図の存在に注目したい。アメリカで描かれ出版された市街地の鳥瞰図に関しては、レップスの詳しい著作がある<sup>7)</sup>。彼によれば、19世紀のアメリカ人は国のイメージに飢えており、人物、自然、街などほとんどあらゆるこの国の生活や地域の相を示すイメージ作品を購入し家やオフィスに飾ったという。そのうち、街の外観を示す市街描図(city view)は印刷されたイメージとして最も人気があるものの一つであり、その多くは少し高い想像上の視点から街を見下ろすように描いたいわゆる鳥瞰図(bird's eye view)であった<sup>8)</sup>。リストウは、この鳥瞰図またはパノラマ的地図の描図、印刷、出版をアメリカにおける地図製作史の特に興味深いフェーズととらえ、それが1830年代に始まり、1880年頃ピークを迎え、第一次大戦頃までポピュラーであったこ

表1 初期シアトルの市街手描き地図・鳥瞰図一覧

番号	絵図タイトル	描図画家	印刷所ないし リトグラファー	出版 (版權)	年次	図葉サイズ (cm)	所蔵場所
1	Plan of Seattle, 1855-6	Phelps, T.S.			1855-6	30.5× 24.1	UWS SPL
2	Bird's-eye View of the City of Seattle, Puget Sound, W.T.	Glover, E.S.	Bancroft, A.L.&Co., SF, Ca.	Glover, E.S.	1878	49.5× 77.4	UWS SPL
3	Seattle, W.T.	Burr, A.	Smith, C.L.	The West Shore, Portland, Or.	1884	21.6× 69.9	UWS
4	Bird's Eye View of the City of Seattle, WT, Puget Sound, County Seat of King County, 1884	Wellge, H.	Beck & Pauli, Litho., Milwaukee, Wis.	Stoner, J.J., Madison, Wis.	1884	41.4× 82.8	UWS SPL
5	Seattle, 1889			Llewellyn, Dodge & Co., Seattle	1889	63.5× 96.5	UWS SPL
6	Birds Eye View of Seattle and Environs, King County, Washington	Koch, A.	Hughes Litho Co., Chicago	Koch, A.	1891	84.6× 127.3	UWS SPL

UWS：ワシントン大学図書館「北西部特別コレクションズ」

SPL：シアトル公共図書館「シアトル室」

図葉サイズ：番号1はSPLのマップ・インデックス・カタログ、番号2~6はレップス(注7①)の記述に従った。

とを指摘した<sup>9)</sup>。レップスによれば、こうした図の人気の衰えるまでに、全米で2,400もの場所で少なくとも一つの描図が製作されたという<sup>10)</sup>。

当時のアメリカにおいて、これらの図の制作に携わった人々は、図を描く画家（アーティスト）、その助手、セールスエージェント、印刷者、出版者などで、多くの人は助手やエージェントとして出発し、後に描図画家として独立したり、また出版や印刷に関わった<sup>11)</sup>。画家は、図の制作のため各地を巡回旅行する。ほとんどのケースで対象となる街の建物及び特徴的な要素のスケッチを隈なく取り、想像上の視点から見た街の道路パターンを示すグリッドを遠近法を使用して構築し、その上にスケッチに基づいて建物等を描き直す<sup>12)</sup>。このようにして完成した原図は通常リトグラフ（石版）の技術で印刷され、一定部数が出版される<sup>13)</sup>。

アメリカ北西部の都市の市街描図製作は、19世紀中頃から始まった<sup>14)</sup>。同地域で活動した当時の巡回画家たちのほとんどは、中西部でその技術を学んだ人たちである。そのうちの一人グローバー（Glover, E.S.）は、最初他の画家のためのセールスエージェントとして働きはじめ、シカゴの印刷屋として自立した後、独立したビューメーカーとなり、1877年にはオレゴン州ポートランドに移動して、シアトル、ポートランド、オリンピア、タコマなどの鳥瞰図を完成させた<sup>15)</sup>。このグローバーの成功が他のアーティストたちのこの地への訪問を勇気づけ、同じ中西部出身のウェルジ（Wellge, H.）やコッホ（Koch, A.）などの鳥瞰図リトグラフの作成につながったのである。このうち、ウェルジはドイツからアメリカに移住し、最初ウィスコンシンで活動、1884年から西部、北西部に移動してシアトルやタコマなどの鳥瞰図を描いた。コッホは、図を描きつつ国中を放浪、23州にまたがりシアトルを含む100を超す鳥瞰図を制作した<sup>16)</sup>。

なお、これらリトグラフの出版を支えたものに、自分の街のプロモーションを重視する新聞や雑誌等のメディアがある。地元の新聞は、巡回アーティストの街への到着からリトグラフの出版に至るまで記事を載せる<sup>17)</sup>。北西部では、ポートランドに拠点を置くザ・ウェストショア誌が多くの頁をリトグラフの市街描図で飾った<sup>18)</sup>。

レップスによれば、アメリカの都市歴史研究者、建築史家などはこれらの鳥瞰図に研究資料としての価値をあまり認めてこなかったという。多くの地図や計画図を使う都市地理学者でさえも、その研究に市街描図を使うことはめったになかった<sup>19)</sup>。しかし、上記のような製作の手順から考えて、これらの図が当時の市街地の状況をかなり正確に再現していることは間違いない。そして、同一の都市で数年ごとに鳥瞰図が作成されている場合は、他の方法では見逃されてしまうかもしれない一つの都市の成長のパターンをそこから掴み得る<sup>20)</sup>。本稿では、シアトルにおいてその可能性を追求したい。

### Ⅲ. 絵図資料と市街地形態

シアトル中心市街地の形成は、1851年11月に現在のウェストシアトル（West Seattle）の地に入植した人たちのなかの一部のグループが、翌年エリオット湾（Elliott Bay）対岸の、後のパイオニアスクエア（Pioneer Square）地区の一部に再移住し、土地占有（claims）を請求したことに始まる<sup>21)</sup>。移住者の一人イエスラー（Yesler, H.）は、製材所（「イエスラーミル」）を海岸沿いに建設し、その南に初期の市街地が形成されはじめた。1853年頃までには、初期入植者たちの占有地がエリオット湾に沿って2マイルほどの長さに並び、ここが後のシアトル中心市街地発展の起点となるのである<sup>22)</sup>。

以下、19世紀中に描かれた絵図資料（手描き地図、鳥瞰図）を写真で提示・紹介しつ

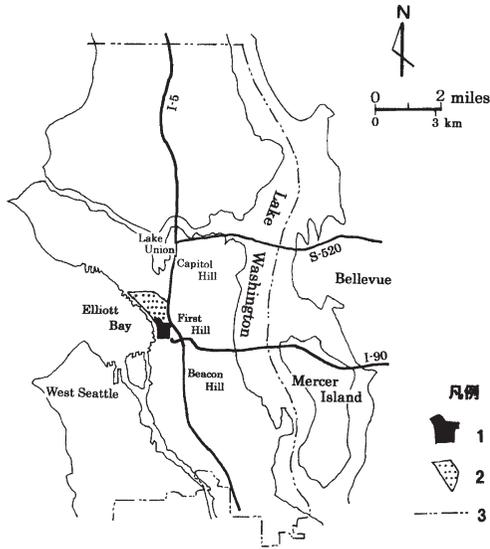


図1 シアトル市の現在の概況

- 1: パイオニアスクエア地区
- 2: ダウンタウンの範囲(概略)
- 3: 市境界

つ、それらが描く当時の市街地形態の特色を読み取っていこう(図1も併せて参照)。写真は、十分な撮影環境が得られなかったこともありやや鮮明さを欠くが、記述は各アーカイブにおいて筆者が実物を検討した結果に基づく。

### (1) 1855-56年手描き地図と最初期市街地

この手描き地図は、シアトル市街地の状況を示す一番早い時期の地図と目される(図2、表1-番号1)。1855~56年のシアトル・インディアン戦争<sup>23)</sup>の際、救援に来た連邦軍の帆船「ディケイター号」のフェルプス大尉によって描かれた一種の手描き地図である。図に見るように、海岸線、等高線、海岸沿いの崖、サンドスピット、スワンブ、イエスラーの製材所とその埠頭、インディアン・キャンプ、バリケード等軍事施設、ディケイター号を含む2艘の船が描かれる。また、家屋が25軒強あり、そのうち5軒ほどは凡例で居住者が示される。街路は破線で示される

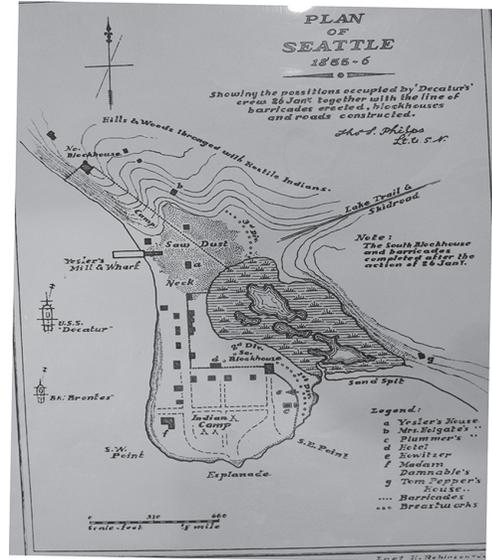


図2 1855-56年手描き地図 (Phelps)

シアトル公立図書館「シアトル室」  
(Seattle Public Library, Seattle Room) 所蔵

が、これは初期の粗い工事による簡易な道路であったことを示唆していると思われる。このように、この時期のシアトルは、最初の定住から数年経たのみの小さなパイオニア集落であったことが推測される。なお、現在の地形との顕著な違いは、海岸線がファーストヒルの西麓で大きく湾入し、サンドスピットで塞がれた湾内がスワンブ状になっていたことである。

この手描き地図がシアトル最古の地図としてよく知られるようになった経緯をアメリカ植民地婦人会 (Colonial Dames of America) ワシントン州愛国奉仕委員会議長のゴウルド (Gould, D.F) 夫人は次のように説明している。シアトル在住のある夫人がその家をたたむ時、一連の歴史的資料を彼女に送ってきた。その包みのなかに、フェルプス大尉のペンのスケッチによるこの地図と沖から見た当時のシアトルの風景スケッチが入っていた。ゴウルド夫人は、アメリカ植民地委員会の本部に資料として提出したほかに、地図を(お

そらくリトグラフで) 印刷してクリスマスギフト用などにとっておいたという。夫人は、入手したオリジナルな図や資料の質を損なわないよう留意したと記している<sup>24)</sup>。

なお、シアトルの歴史家バグレイ (Bagley, C.B.) は、1930年にこの地図の修正版を製作・出版しており、前述した矢ヶ崎論文やホームズの著作にも収録されている<sup>25)</sup>。これは、フェルプス大尉の手描き地図に現在の街路を重ねたもので、施設、住居等の凡例も追加され、計14を数える。この修正地図によってフェルプス地図に描かれた道路等事物の位置がより正確に比定でき、図2の南北の道路は後の第一街南 (1st. Ave. S.) に、東西の道路はジャクソン通り (Jackson St.) に相当することが分かる。

## (2) 1878年鳥瞰図と市街地形態

グローバー (前述) によって1878年に描か

れたシアトル最初のオリジナルな鳥瞰図である (図3、表1-番号2)。エリオット湾の上空、西南西斜め30度くらいから俯瞰した情景を表現している。図は、街路網や建物を詳細に描写しており、さらに丘陵地、平地、海岸線等の地形、植生 (針葉樹)、埠頭 (10ほど)、鉄道、道路上の人馬、馬車、海上の船等も表現している。

前述のフェルプス地図 (1855-56) と比較して、市街地の拡大は顕著である。東はファーストヒル (First Hill) を登って一部第10街 (“TENTH ST” と記載) まで街路が記される。北は、パイン通り (Pine St.)、オリーブ通り (Olive St.) あたりまで街路が見られ、現在のダウンタウンの範囲内は疎らながらほぼ市街地化したことが分かる。その北東のキャピトルヒル (Capitol Hill) はまだ丘陵と森林のままである。市街地の南はジャクソン通りまでで、その南は湾曲した海になっており、まだ



図3 1878年鳥瞰図 (Glover)

ワシントン大学図書館「北西部特別コレクションズ」所蔵  
(University of Washington Libraries, Special Collections, UW14531)

後年の広い埋め立て地は形成されていない。西の海岸に一番近い街路はフロント通り (Front St., 今の第一街) で、海までには大きな段差 (崖) が表現されている。海に突き出ている顕著な部分は、一つがシアトルーワラワラ鉄道の線路で、先端は埠頭になっており、帆船が停泊している。もう一つが、イエスラーの製材所とその埠頭で、その北に貯木場らしき海域が描かれている (図4)。以上から、当時の市街地は南北約1.7キロメートル、東西1.1キロメートルほどの範囲に広がっており、中心部は建物が密集する都市的な状況を呈していたことが分かる。ただし、建物はほとんどが2階建て以下で、3階以上のものは例外的である。

図には凡例が数字で20項目示され、集落 (都市) 内の主要な施設の存在を読み取れる。うち3つが湖や山地など地形要素だが、他に

教会が7つ、裁判所、大学、高等学校、公立学校、ホール2、議会なども含まれる。図には商店が表現されていないので、商業的な機能の発達度は判断できないが、他の施設の存在から見て、ある程度初期の都市としての機能を備え始めたのではないかとと思われる。

### (3) 1884年鳥瞰図と市街地形態

1884年に描かれた鳥瞰図には2種類あり、一つは、バール (Burr, A.) 描図によるものである (図5, 表1-番号3)。画家のバールについては、レプスの著作において言及がなく、図が製作された背景は不詳である。

図は、北の上空に視点を置いて南を見た鳥瞰図で、正面ビーコンヒル (Beacon Hill) の向こうに薄くレーニア山 (Mt. Rainier) が描かれる。街路、建物、埠頭、丘陵 (手前がキャピトルヒル)、樹木等が描かれる。この

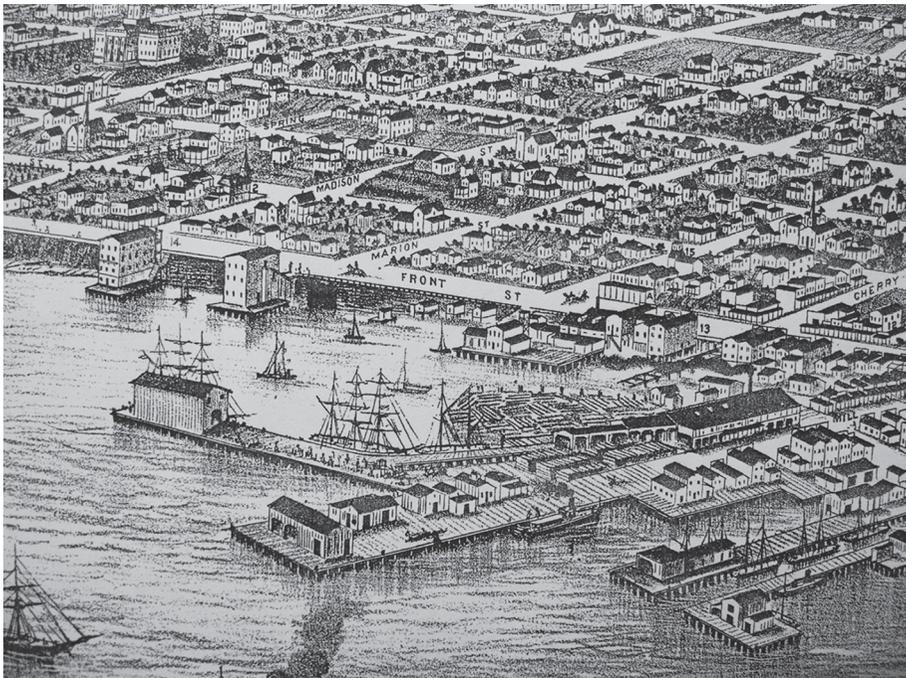


図4 1878年鳥瞰図 (Glover) の一部

ワシントン大学図書館「北西部特別コレクションズ」所蔵  
(University of Washington Libraries, Special Collections, UW14531)



図5 1884年鳥瞰図(Burr)の一部

ワシントン大学図書館「北西部特別コレクションズ」所蔵  
(University of Washington Libraries, Special Collections, UW40921)

図は、視点が低く建物が重なって描かれるためブロック内の建物数を正確に判断できない部分もある。また、街路名の記述はなく、地図というより絵画的な性格が強い。そのため、1878年鳥瞰図からの市街地の拡大がどの程度なのか、正確には読み取れない。なお、市街地南の湾入はなお大きく入っているが、その形状の詳細は不明である。なお、筆者の入手・撮影した図は黒の単色で描かれたものであるが、本来は多色のリトグラフであったようで、前述したウォレンの著作の冒頭を見開きでこの多色刷り鳥瞰図が飾っている<sup>26)</sup>。

もう一つは、同年にウェルジが描いたものである(図6, 表1-番号4)。前述したグローバーの図(1878年)とほぼ同じ方向(西南上空から)と視線角度をもつ図である。図に見るように、街路、建物、埠頭、鉄道、地形(丘陵)、樹木、海岸線、ワシントン湖、

ユニオン湖等を表現している。特に建物の表現が詳細、精緻であり、当時のシアトルの建造環境を具体的に識ることができる(図7)。かなり細かい凡例がついており、数字、符号で諸施設(教会12, 学校5, 公共施設・ホテル12, 銀行3, 工場15)を指示している。

1878年鳥瞰図に示された状況からの市街地の拡大を見ると、西方ファーストヒル上へは2ブロックほど、また北方へは以前家屋数が少なかったオリーブ通りより北6ブロックほどにも建物が増え、実質市街地化していることが分かる。しかし、こうした水平的拡大よりも中心部での建物数の増加と高層化による垂直的拡大の方が顕著であると言える。すなわち、東西はフロント通り～第八街(8th Ave.), 南北はマリオン通り(Marion St.)～ジャクソン通りあたりまでは連続的市街地となり、建物密度が高く、特に海岸寄りには3



図6 1884年鳥瞰図 (Wellge)

ワシントン大学図書館「北西部特別コレクションズ」所蔵  
(University of Washington Libraries, Special Collections, UW1607)

階建てや一部4階建ての建物が集中していることが分かる。商店は特定できないので、商業機能の充実度は不明であるが、前述のホテル、銀行の数と併せてある程度の都心商業業務地区が形成され始めたかと解釈できるのではないだろうか。なお、埠頭の数も14ほどで、描かれた船の数も多く、港湾の機能がさらに拡充したことが推測される。

#### (4) 1889年鳥瞰図と市街地形態

1889年に不動産・採鉱・競売などを扱うシアトルのルウェリン社によって製作・出版された鳥瞰図である(図8, 表1-番号5)。図には画家、印刷者の記述はなく、またレップスの一覧表の同項目の欄は空欄となっている<sup>27)</sup>。グローバーやウェルジとほぼ同じ方向・視点から描いている。これまでの図とほ

ぼ同様、街路、建物、埠頭、鉄道線、地形(丘陵)、樹木、さらにワシントン湖(Lake Washington)、ユニオン湖(Lake Union)、カスケードの山々等が表現されている。中心部の建物密度は、さらに高くなった様子で、ミル通り(Mill St., 後のイエスラー道 Yesler Way) 海岸寄りの南北数ブロックには3階建てのビルが密集している模様である。市街地の範囲は、かなり拡大した様子が窺える。北はユニオン湖のかなり近くまで延びているが、湖岸はまだ開発されていないと推測される。東は今の第八街のあたりまで密に家屋が立ち、その東の丘陵上にも道路割りが施され、家屋が散在している。なお、この図はおそらく1889年6月の大火災<sup>28)</sup>前の状態と推定される。

この図が製作された背景は、よく分らな

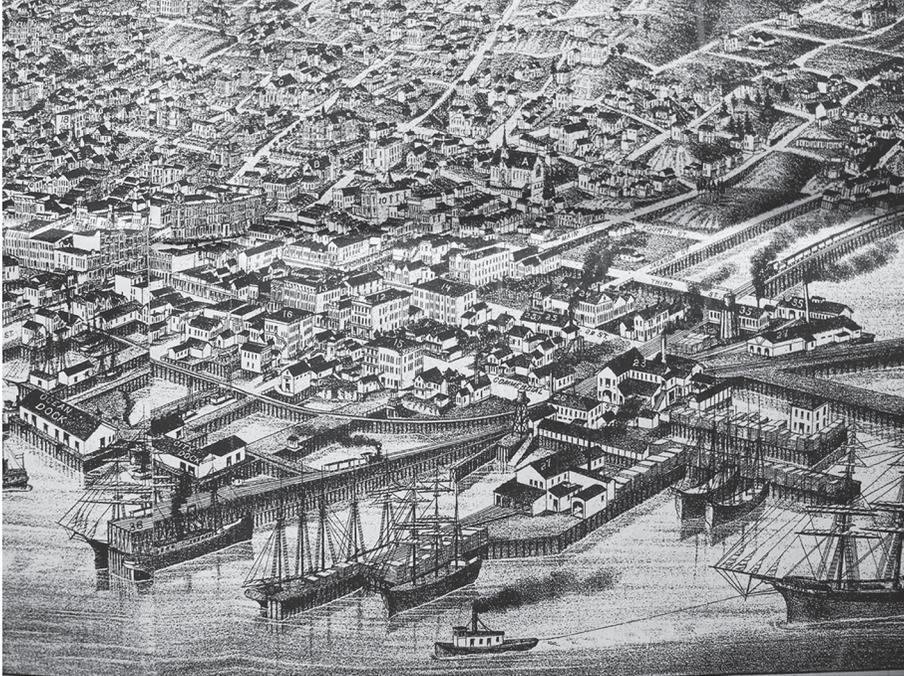


図7 1884年鳥瞰図 (Wellge) の一部  
 ワシントン大学図書館「北西部特別コレクションズ」所蔵  
 (University of Washington Libraries, Special Collections, UW1607)

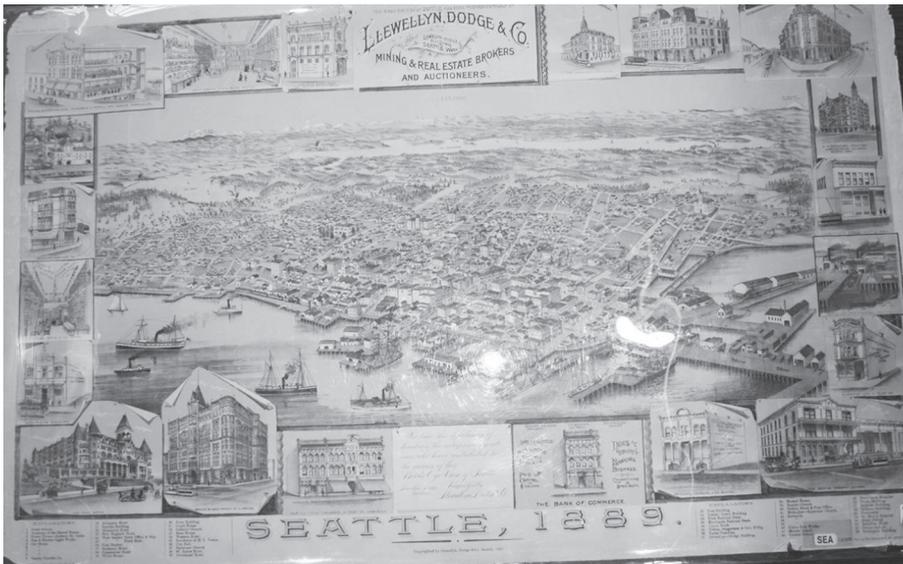


図8 1889年鳥瞰図 (Llewellyn)  
 ワシントン大学図書館「北西部特別コレクションズ」所蔵  
 (University of Washington Libraries, Special Collections, UW40922)

い。図で注目されるのは主図の周りに20ほどの建物を描いた挿絵 (vignette) が掲載されていることで、出版したルウェリン社が不動産ブローカーであることを考えると、不動産業の宣伝が主目的でこの図が作られたと見るべきかもしれない。ちなみに、レプスはこうした挿絵が建築史家や保存の専門家にとって初期の建物の建築スタイルを調べる際、魅力的な資料を提供すると述べている<sup>29)</sup>。

#### (5) 1891年鳥瞰図と市街地形態

最後にコッホが1891年に描いた鳥瞰図を取り上げる (図9, 表1-番号6)。多色刷りの大きな図であり、精緻な描図表現がなされている。先行図より高い視点からの (急角度の) 鳥瞰図であり、より通常の地図に近いと言えよう。全ての街路が明瞭に表現され、先行図では必ずしもはっきりしなかった市街地の範囲がかなり明確に読み取れる。ユニオン湖やワシントン湖の湖岸沿いの市街地発展を

よりよく表現しており、ユニオン湖の北岸にも一部市街地が伸びているのが見て取れる。西のファーストヒル上からワシントン湖にかけては、かなり広い部分で森林が伐採され道路が伸びているのが目につく。家屋は面的に密集していないが、道路に沿って伸びていることが分かる。西のウエストシアトル地区にも若干街路網が見られるが、建物は疎らである。

中心部に目を移すと、現在のダウンタウン域の街路網は、ほぼ完成した様相を呈している。特に注目されるのは、ミル通りを挟んだ海岸寄りの地区において建物が赤茶色に表現されている部分があることで、これはおそらく前述のシアトル大火 (1889) の焼失範囲とほぼ重なる領域であろう。ちなみに、この地域は、大火後の再建において煉瓦外壁や石造の建物を基調とした都市計画が実施されたところである。文献によれば、このとき再建された建物は一般的に3~5階<sup>30)</sup>、一部の建物



図9 1891年鳥瞰図 (Koch)

ワシントン大学図書館「北西部特別コレクションズ」所蔵  
(University of Washington Libraries, Special Collections, UW1608)

は5～8階に達した<sup>31)</sup>というが、コッホの図は急角度から見た図であるため、建物の階数は正確には読み取り難い。いずれにしてもこの時期、現在のパイオニアスクエア地区のあたりに、ある程度高層化された都心商業業務地区が姿を現しつつあったと推定される。なお、図にはいくつかの鉄道線も示され、湾を横切る延長線路も表現されている。また、港湾の埠頭は少なくとも20を超え、描かれた船の数も多い。シアトルの輸送機能や港湾機能も急速に充実していったものと思われる。

#### IV. 結語

19世紀のアメリカは、都市の急速な発展期にあり、都市のビジュアルなイメージを表現する市街鳥瞰図作品の描図とそのリトグラフ印刷がブームと言えるほど盛んであった。シアトルは、19世紀後半における初期市街地を対象として、手描き地図や鳥瞰図リトグラフが一定の間隔で制作された代表的な都市の一つである。それらのほとんどは、現地の大学文書館、公共図書館に所蔵されているが、日本ではほとんど紹介・検討されていない。しかし、これらの図は建物や街路を具体的にビジュアルに描いているので、当時の建造環境をいきいきと表現していると思われる。本論では、それらの製作背景を探るとともに、各年次の図が示す市街地形態の特色を検討・考察した。その結果、シアトルにおける市街地開発の状況、市街地の経年的拡大、建物の高層化の状況、鉄道や港湾など機能の充実を、推論を交えつつもある程度具体的に示し得た。このことは、一つの都市の市街地発展過程の歴史地理学的解明に鳥瞰図等の絵図資料がきわめて有効であることを示している。

しかしながら、地理学的な視点からシアトルの都市発達過程を解明するという目的にとって、本論の段階では多くの研究課題を残している。それらを列挙すれば、次のようなことが言えよう。1) 本稿で使用した手描き

地図、鳥瞰図等の精度を、通常の市街地図類や歴史家の記述など他の資料と比較しつつ検証する。2) 他の資料を併用して、シアトル市街地の発展の歴史地理学的検討を総合的に推進し、都市地域のもつダイナミズムの理解を深める。本稿が、その出発点となれば幸いである。

(岩手大学・名誉教授)

#### 〔付記〕

本稿で使用した鳥瞰図の写真(第3～9図)は、ワシントン大学図書館「北西部特別コレクション」の許可を得て掲載した。なお本稿は、東北地理学会2013年春季学術大会(5月19日)における口頭発表の内容を加筆修正したものである。

#### 〔注〕

- ①Sale, R., *Seattle: Past to Present*, University of Washington Press, 1976. ②Warren, J.R., *King County and Its Emerald City: Seattle*, American Historical Press, 1997.
- ①MacDonald, N., *Distant Neighbors: A Comparative History of Seattle & Vancouver*, University of Nebraska Press, 1987. ②Holmes, A., *Seattle: The Growth of the City*, Chartwell Books, Inc., 2007.
- Schmid, C.F. and Schmid, S.E., *Growth of Cities and Towns: State of Washington*, Washington State Planning and Community Affairs Agency, 1969.
- Brown, M. and Morrill, R., eds., *Seattle Geographies*, University of Washington Press, 2011.
- 矢ヶ崎孝雄「クィーン都市シアトルの特色と発展」『アメリカ・カナダの自然と社会』大明堂, 1990, 450-468頁。
- 永野征男「シアトル市域の拡大にともなう地域構造の変容」『アメリカ・カナダの自然と社会』大明堂, 1990, 431-449頁。
- ①Reps, J.W., *Panoramas of Promise: Pacific Northwest Cities and Towns on Nineteenth-Century Lithographs*, Washington State Univ. Press, 1984. ②Reps, J. W., *Bird's Eye Views:*

*Historic Lithographs of North American Cities*,  
Princeton Architectural Press, 1998.

- 8) 前掲7) ②7頁。
- 9) Ristow, W.W., *American Maps and Mapmakers: Commercial Cartography in the Nineteenth Century*, Wayne State University Press, 1985, p.261.
- 10) 前掲7) ②7頁。
- 11) 前掲7) ②8頁。
- 12) 前掲7) ②10頁。
- 13) 前掲7) ②7頁。
- 14) ちなみに、この地域における最も早い街のリトグラフは、1846年ウォーレ (Warre, J.H.) によって描かれたオレゴンシティの描図であるという。前掲7) ①8頁。
- 15) 前掲7) ①29頁, 33頁。
- 16) 前掲7) ①33頁, 41頁, 46頁。
- 17) 前掲7) ②9-10頁。
- 18) 前掲7) ①46頁。
- 19) 前掲7) ①49頁。
- 20) 前掲7) ①49頁。
- 21) 前掲2) ①3-4頁。
- 22) 杉浦 直「シアトル・パイオニアスクエア—旧都心地区の保存と再活性化—」アルテス・リベラレス (岩手大学人文社会科学部紀要) 103, 2018, 193頁。
- 23) 1855年から56年にかけての、シアトル地方における先住民と白人移住者との間の一連の紛争, 特に1856年1月26日におけるシアトル集落での武力衝突を指す。The Laboratory Writing Classes of Cleveland High School, *The Duwamish Diary 1849-1949*, Cleveland High School, Seattle, 1949, pp.28-34 (“The Indian War”).
- 24) *The Indian Attack on Seattle, January 26, 1856*, Farwest Lithograph & Printing Co., Seattle, 1932, Preface (*Quarterly Review of Military and Naval Affairs*, Vol.5, Dec. 1881, No.6からのリプリント。なお, 非常に長い副題は省略した)。
- 25) 前掲5) 455頁。前掲2) ②12頁。
- 26) 前掲1) ②冒頭II-III頁。
- 27) 前掲7) ①89頁。
- 28) いわゆる「シアトル大火」。1889年6月6日発生, ダウンタウンの30ブロック以上, 約60エーカーが焼失。前掲1) ①50頁。
- 29) 前掲7) ①23頁。
- 30) Kreisman, L., *Made to Last: Historic Preservation in Seattle and King County*, Historic Seattle Preservation Foundation, 1999, p.85.
- 31) 前掲2) ①37頁。